☆ 教育目標の具現化に向けた2学期の重点事項

教育目標 「 **自ら学び 協働して 主体的に 取り組む生徒を育てる** 」

1 「自ら学び・主体的に」について 生徒像：「自立し他者に依存しない」「心身共に健康で我慢強く学ぶ」

主体的な生徒の姿＝きつい方を選択できる、考えることから逃げない、他者とのやりとりを大切にできる。

他者に「助けてほしい」「一緒に取り組もう」と言える。

「自分なら・・・」（どうする、どう考える）を心がける。（＝判断力の育み）

他者の話を聴くことができる、自分の思いを自分の言葉で伝えることができる

＝書く活動が基盤になる

自分の学習（学習態度や姿勢を含む）を調整したり、段取りを立てたりできる。

（＝学習に対する調整）

(1) 教科指導の充実・・・授業充実に向けた「届く・響く・残る授業：笑顔あふれる授業」を求めて

～ 授業（教科指導）の充実に向けた留意点 ～

①授業のねらいや教科指導の目標を**生徒の姿**で明確にし、ゴールの具体的なイメージを持つ。（届く）

○単元の最初にする教材研究は、最後の授業の教材研究で、その逆算によって授業を組み立てる。

（届ける「こと・もの」を明確に見通す）

②「対話的・主体的で深い学び＝この基盤となる書く活動の重視」の授業を実践的に進める。（響く）

○探求型の能動的な学習へ（生徒は、受け身ではなく、主体的・能動的に）

○知識活用型の対話的な学習へ（他者とのやりとり学習へ）

○インクルーシブ学習の基盤に（何処でも誰とでも繋がって、学習の広がり、深まりを実感させる）

○やり取りに必要な基礎や基本の習得の徹底（教えるべきことは徹底して教える）＝必須

○教師が「説明、しゃべり、確認・・・」をし過ぎることが、対話（やりとり）の主体性に影響

*理解の深まりに必要な「適切な発問、問いかけ」、「待つ、任せる」も必要。

*「何ができて何ができていないか、どこに課題が」を見取ることも欠かせない。

③（具体的な）授業の留意点

①「めあて（課題）」と「まとめ」が生徒に「届く」授業を実施する。（届く）

・学ぶ意味を持たせる「めあて」。・次に生かせる「まとめ」。（残る）

・確かな「めあて」をもって、「個」から始めて「個」で終わる。

・「まとめ」や「振り返り」が学びの質を上げる。（残る）

②授業は、熟考を重ねて単純化する。（効果的な発問や指導：響く）

・導入は、時間への導入ではなく、知的好奇心への導入を心がける。

③「思考を深める発問」の工夫や研究を進める。（届く・響く）

④「学習規律の徹底」と「支持的風土の醸成」の推進＝協働する基盤・安心して学べる授業

⑤板書は、授業構想の図式化を心がける。（残る）

⑥「言語活動」（表現活動や学習言語の習得）の充実を図る（響く）

⑦ねらいに即した「書く活動」を重視する授業の推進する。＝主体性を引き出す基盤（残る）

⑧やはり、基礎基本が特に大切である。やり取りさせる前に教えるべきことは、徹底的に教える。

（生徒が簡単に諦めない手立てを）

⑨思考の深まりには、静かに考えさせることが必要である。（場の設定＝残る）

⑩更なる指導と評価の一体化の推進（評価の在り方）について研究を進める。

*生徒に評価する内容や手立てについて事前予告することも大切である。（届く）

(2) 校内研修（全体研修＋自己研究）の充実

①校内研修での学びを共有し、共通理解を図り、実践に繋げていく。

☆各教科での書く活動の授業について（特に意識すること）

- ②次時への授業や取組に繋がる「見通し」と「まとめ」の共有。
- ③授業に生徒指導の3機能を意識した工夫や働きかけを＝授業の基盤
・自己肯定感を与えるために　・共感的な人間関係を育むために　・自己決定の場を与えるために
- ④各教科ごと、2学期以降の授業において、手立ての工夫や改善点等を実践（試行）し、成果や反省を共有しながら、授業改善に努める。

(3) 生徒指導の充実・・・更なる生徒理解に努める。（せざるを得ない理由や根拠が必ずある）

生徒理解は、生徒の心に灯りをともすこと。見通しを立て希望を与えること。

☆生徒指導の3機能の推進（学習指導と生徒指導は両輪である）

- 「自己決定（教師の思いをしっかりと届けて、自己決定させる）」
- 「共感的な人間関係（活動実践の中で、互いの心を響かせる）」
- 「自己肯定感（これを残す積み重ねが、主体的な行動を起こさせる）」

(4) 特別支援の充実（すべての生徒に学びの追い風を。生徒理解の手立て・手段ともなる）

- ①すべての生徒のための特別支援教育を推進する。
- ②特別支援教育の視点で全生徒への支援・配慮事項を意識・共有する。
- ③個の応じて作成した「心や学びを支えるための指導計画・支援計画」の育みを進める。

2 「協働して」について・・・生徒像：「考え、明るく活力ある生徒」

(1) 道徳教育の充実・・・○多様な考えや意見等に触れながら、互いを尊重し、心を磨く・育む。 ＝協働するための基盤を育む。

(2)

教科指導の充実・・・①「言語活動」（表現活動や学習言語の習得）の充実を図る。

- ②「学習規律の徹底」と「支持的風土の醸成」の推進＝協働する基盤
- ③協働する生徒の姿（簡単に諦めず、力を合わせて問題に立ち向かう）の推進
＊そのための貴重な経験と多種多様な学びを授業の中で

④「書く活動」を充実させるために（大切にしたい書く活動の3つの視点）

- 視点1：考える材料：既習内容や自分の経験、友だちの意見は、子どもたちが考える手がかりとなります。考える材料は、子どもたちの考えの根拠にもなるのです。
- 視点2：安心感：「書く内容や書き方が分かる」「この学級だったら、自分の考えを表現しても大丈夫」という子どもたちの安心感は、書く活動の基盤となります。
- 視点3：相手意識：「自分の考えを相手に伝えよう」と思うことで、文章を見直したり表現を工夫したりするようになり、更に考えがまとまります。

(3) 特別支援教育の充実 ①すべての生徒のために「5つの合い」の関係性を育む＝協働する姿 「学び合い、磨き合い、認め合い、支え合い、励まし合い」

- ②個に応じた計画的な指導を行いながら、関係機関との連携を図る。

(4) 特別活動の充実・・・○学年、学級、生徒会等の自治的な活動・取組において、主体的かつ協働的な活動・取組の充実を図る。

- 清掃活動や自治活動における意欲的かつ主体的な行動の中において、
「時」・「場」・「人」をみて行動（判断）する（できる）ことを意識する。
（させる）。

＊無言清掃の推進　＊あいさつの推進

- 生き方学習・キャリア学習・郷土学習（職業人の生き方や職場での経験）を通して、郷土を担う・愛する心の育み、地域貢献への意欲等の基盤を育むと共に、生き方や地域の魅力を受け止める基準（ものさし）の育みに繋げたい。

(5) 家庭・地域との連携・・・保護者・地域との連携・協働に努め、信頼される職員集団をめざす。

(6) 生徒指導の充実・・・①生徒理解を基盤とした加点法的な生徒指導を行う。

②2つの「報連相・訪連早」を心がけ、組織的・協働的に力を合わせて
問題に対応する。職員文化の育みを進めましょう。

3 人事評価制度について

(1) 業績評価について

○自己評価・・・人事評価標（業績評価）の最終申告（自己評価）の欄に評価基準日（1月15日）までの自己目標や具体的方策の達成状況や成果、次年度に向けた課題を記載する。また、自己目標や具体的方策の達成状況等について、業績評価の「目標ごとの評価基準」に照らし、5段階で自己評価を行う。1月下旬（30日）までに提出。

(2) 能力評価について

○自己評価・・・人事評価標（能力評価）の評価（自己）の欄に評価基準日を1月15日とし、能力評価に示された評価項目の評価要素ごとに、「職務を遂行するうえで通常必要な水準・着眼点」に示された職務行動等を安定してとることができていたかどうかの観点から振り返り、「項目ごとの評価基準」に照らし、「SS、S、A（標準）、B、C」の5段階で自己評価を行う。1月下旬（30日）までに提出。

～ 生徒がこれから生きていくために ～

生徒のこれからのために、必要な「育ませたい力」をまとめると

- ①「問題や課題と向き合い、それに挑む（解決する）力」、そのために
- ②協働して取り組む力（対人との協調性・コミュニケーション力・やり取りできる力等）
- ③主体的に取り組む力（自主自律・主体性、主体的な姿） この3つになると思われる。

この3つから、我々が目標とする生徒像を一言で表現すると、「自分の未来を諦めない生徒」を育てることと受け止められる。つまり、学校生活（我々の授業や指導、係わり合い等）の中で「諦めない力」を育んでい

なければならないということである。その諦めない力の種は、学力であり、他者と協働する力（繋がる力）

であり、問題に自ら（主体的に）向かいそれと向き合っていく経験である。そこで感得する失敗経験であり、達成

感であり、自己肯定感（一人力＝自分の意見を持つ、自分なら・・・を持つ）である。それらすべてが生きる力の種（あるいは成長の種）や礎になっていく。

教育目標スローガン ～ 未来を主体的に創造（想像）しよう ～

3つの「しん」・・・「新化」・「進化」・「深化」と 3つの「どう」・・・「主働（導）」・「実働」・「協働」を

本物は続く、続けると本物になる

「ナンバー1」を目指すことも大切だが、「オンリー1」を大切にすること